

コメ輸出価格 最低に

富裕層向け鈍化 業務用へシフト

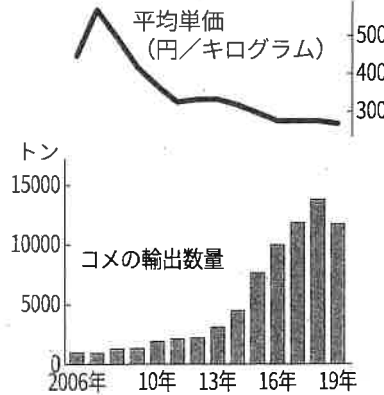
19年見通し

2019年に海外へ輸出するコメは過去最低の平均単価になる見通しだ。高単価な富裕層向けの販売が伸び悩む一方、割安なコメを求める和食店など業務用の出荷が伸びているためだ。下落傾向はここ10年ほど続いている。割安なコメの需要が拡大したことで輸出量が増え、今年1～9月の輸出金額は31億円と5年前の14年通年の2倍強になった。

輸出量は最多更新へ

農林水産省がまとめた資料によると、1～9月のコメ(援助米を除く)の輸出単価(FOB日本船渡し)は1キログラムあたり263円と前年同期比3%下が安くなっている。

割安なコメが輸出を押し上げた



(注)19年は1～9月 (出所)農林水産省の資料より作成



割安な銘柄の輸出が多い(収穫前のキヌヒカリ、新潟市)

日本産米は当初、海外の百貨店やスーパーなどで富裕層向けの販売が多かったが、近年は業務用向けが台頭してきたことが背景にある。輸出を手掛ける大手卸は「日本産のコメだからと高く売れる市場は既に飽和した。割安なコメを求める外食向けの販売が全体の過半になった」と話す。

13年に「和食」がユネスコ無形文化遺産に登録され、すし店、居酒屋といった和食店が世界各地で急増した。農水省によると、海外の和食店は17年に約11万8千店と、06年比で5倍ほどになった。「日本産米使用」を売りにする店舗も多くなっているが、業績に直結する食材の仕入れ値を抑えたいと、安い銘柄に需要が集中している。

万1752と、前年同期を24%上回った。19年は過去最多を更新する見込みだ。13年から約5倍に急増した。輸出先は香港(33%)、シンガポール(23%)、アメリカ(12%)と続く。各国・地域とも平均単価は下がりつつあり、低価格の銘柄を選ぶ店舗への販売が増えているようだ。

農家のコスト減必要 米国の7倍 近年横ばい

政府は日本産米の輸出に力を入れている。輸出競争力を付けるには、農家の大規模集約化で生産コストを引き下げざるほか、流通コストも引き下げる施策が必要だ。日本産米の生産コストは海外産米と比べて高い。農水省によると、17年に日本は1俵(60キログラム)のコメ生産費が約1万5千円、米国は2千円強と約7倍の差がある。コメ農家の作付面積の平均で100倍以上の違いがある。産地も低価格のコメを優先して出荷する。10年ほど前から新潟産のコメを輸出する生産者団体、新・新潟米ネットワーク(新潟市)の坪谷利之氏(新潟市)は「割高なコシヒカリは海外の和食店と価格が折り合わず、1～2割安い『こしいぶき』や『キヌヒカリ』などの出荷を増やしている」と話す。

コメ輸出には複数の卸業者を経由することが多く、流通コストも高くなりがちだ。秋田県の大瀧村あきたこまち生産者協会(大瀧村)は今年11月から商社など中間業者抜きでの輸出を始めたところ、台湾のスーパーなど向けで売価を最大3割ほど下げられる見込みだという。